外国の研究動向

伝承者理論から見たロシア口承文芸学

斎藤君子

ソビエトにおける口承文芸理論の動向を、ロシアの伝承者に関する問題を中心に紹介したい。

ロシアで口承文芸の担い手に対して関心が払われるようになったのは、ヨーロッパの他の国々よりかなり早く、この分野における研究はロシア口承文芸学を特徴づける、一つの主要な柱といってよく、歴史的に見て、次の三つの段階に区分できる。

第一段階

ロシアにおいては、口承文芸の伝承者とは古い伝統的文化の単なる管理者ではなく、口承文芸の主体、すなわち口承文芸を創造する過程にみずから積極的に参加している、才能に恵まれた個人であると見なされてきた。こうした見方が一九世紀のロシアにおいて生まれたことは、けっして偶然ではない。その背景には当時の社会情勢がある。ロシアにおいて口承文芸の本格的な収集がはじまるのは、一九世紀前半における農奴制廃止の闘争の中であり、農民の生活、文化に対する関心が高まっていた時期にあたる。口承文芸というものは伝統的な民族文化である以前に、農民が創造し、育んできた農民文化であるとする認識が根底にあった。

伝承者に関する問題へのアプローチは昔話の分野ではなく、叙事詩の分野から始まった。ロシアの英雄叙事詩ブィリーナを吟ずる人々との出会い、彼らの生い立ち、吟じ方の特徴など、伝承者や伝承の場に関する情報をテキストと共に収めた最初の資料集を世に送り出したのはP・N・ルィブニコフ[1]である。これは一般にはロシアの英雄叙事詩ブィリーナの最初の記録集として知られているが、この資料集の価値はブィリーナをテクストの内容という側面からだけ見るのではなく、伝承者の個性や伝承形態に注目した点にあり、こうした姿勢は後の研究者たちにも受け継がれ、ロシア口承文芸学の優れた伝統となった。

ルィブニコフの資料集の第三巻が刊行された一八六四年、キエフではロシア地理学協会南西支部会議が開催され、N・V・ルィセンコがウクライナの叙事詩ドゥーマの吟唱者オスタプ・ヴェレサイについて特別講演を行っている。

この一八六四年という年はアファナーシエフの編集した『ロシア昔話集』の最終巻が出版された年でもある。しかし残念ながら、この資料集には語り手に関する情報は含まれていない。昔話の分野で

語り手についての記述が載るのは、後述するように、それから二〇年後の一八八四年に出版された、サドーブニコフの資料集[2]が最初であり、伝承者に関する研究においては、叙事詩の分野が先行する。

さらに一八七三年にはA・F・ギリフェルジングがルィブニコフと同じくオロネツ県において二か月間に三百話のブィリーナを記録し、『オネガのブィリーナ』[3]と題する資料集を出版している。彼はこの仕事の中で、口承文芸を記録するにあたっての原則を確立すると同時に、テクストを伝承者別に配列し、テクストの前に伝承者の簡単な生い立ちと、その伝承者の吟ずる叙事詩の特色を記述した論文を付けることによって、伝承者に関する問題に理論的意味づけを与えた。ギリフェルジングはこの資料集の中で、「わたしはブィリーナの吟唱者と知り合うとき、叙事詩の性格に吟唱者の個性がどのような影響を及ぼしているかを明らかにするために、彼ら一人ひとりの置かれている状況に注意を払うよう努めた」と書いている。

昔話のジャンルでギリフェルジングの考えを継承し、語り手に注目した最初の人物はD・N・サドーヴニコフである。彼は七〇年代の末にA・K・ノヴォポーリツェフから昔話七二話を記録したが、残念ながら資料集の出版準備を終えることなく、世を去った。サドーヴニコフの資料集の出版をロシア地理学協会から委任されたのは、泣き女フェドソーヴァの研究によってすでにその名を知られていたL・ja・マイコフであった。こうして伝承者に深い関心を抱いていたロシアの二人の優れた研究者の協力によって誕生したのが『サマーラ地方の昔話と伝説』（一八八四年）であり、ロシアにおける昔話研究史に新しい時代を画す書となった。

以上のように、口承文芸の伝承者に関する理論の基礎が一八六〇、七〇年代に活躍したロシアの研究者たちによって築かれたことは、M・K・アザドフスキーが指摘しているように、当時のロシア口承文芸学の際立った特色といえる。

第二段階

集団の創造になる口承文芸の伝承の中で個の果たす役割を把握しようとするこの試みは、今世紀に入って第二段階を迎え、一九世紀の民主的姿勢を継承し、昔話が農民の間で果たしている機能や語り手に注意を払った昔話資料集が次々と刊行されはじめる。その最初のものは、N・E・オンチュコーフの手になる『北方の昔話』[4]（一九〇八年）である。そこには、昔話が記録された地域における農民の日常生活、昔話の語り手たちの一般的性格に関する情報がテクストと共に収められている。これに続いて、D・K・ゼレーニンによる『ペルミ県の昔話』[5]（一九一四年）と『ヴャトカ県の昔話』[6]（一九一五年）、M・K・アザドフスキーによる『レナ河上流地方の昔話』が刊行されている。『レナ河上流地方の昔話』[7]は一九一五年に編集されたものの、一九一七年のロシア革命勃発以前に出版にこぎつけることができず、実際にこれが世に出たのは内戦が終了した一九二五年のことである。この資料集のまえがきに収められたのがシベリアの語り手N・O・ヴィノクーロワに関するアザドフスキーの最初

の論文である。これは後にドイツ語で書き改められ、一九二六年にフィンランドで出版された。[8] 伝承者に関する「ロシア学派」の理論はこの論文によって世界に広く知られるところとなり、外国の研究者たちに大きな影響を与えた。この論文はわが国にも関敬吾によって紹介され、わが国の昔話研究に新しい視点をもたらしたことは周知のとおりである。アザドフスキーにここでヴィノクーロワの語りの特徴を他の語り手たちの語りと比較することによって浮き彫りにすることに成功している。

その後一九三二年に彼はこの論文で確立した、語り手の比較研究をさらに発展させるために、『ロシアの昔話――優れた語り手たち』[9] 全二巻を編纂している。この資料集には優れた語り手一五人の語る昔話三九話が集められ、テクストの前に八〇頁におよぶ、アザドフスキーの語り手論が収められている。彼はこの論文で一五人の語り手たちの語りを比較し、それぞれの語り手の特徴を明らかにするとともに、ロシアとヨーロッパの昔話研究の歴史を背景として、語り手論について解説している。この論文は語り手を論ずる上で心読の書であるにもかかわらず、ソビエト以外の国ではほとんど知られていないことは残念である。

革命後間もない一九二一年、ロシア地理学協会の中にS・F・オルデンブルグが率いる昔話委員会が設置され、重要な資料集が堰を切ったように続々と刊行され、その後の昔話研究を大きく前進させる原動力となった。

二〇年代においては、ロシアの農村の生活は革命前とあまり変わりない状況が続いた。口承文芸についていえば、この時代にはロシアの伝統的な昔話、ブィリーナ、儀礼歌、叙情歌などが記録される一方、日ロ戦争のときの歌をはじめ、新しく生まれた革命歌やコムソモールの歌が記録されるなど、この時代は活気にあふれた時代であった。

第三段階

伝承者に関する理論の発展の第三段階は、一九三〇年代後半から戦後一〇年ぐらいまでの時期に相当する。三〇年代に農業の集団化が進められた結果、都市への人口の集中がはじまり、人々の生活は大きく変貌しはじめる。本や映画など、新しい文化が民衆の間に広まるとともに、伝統文化が急速に衰退し、フォークロア離れというべき現象が生じる。こうした状況の中で、研究者たちは精力的な収集活動を展開し、カレリア、ヴォルガ河流域、中央部、シベリアなど、ロシア各地から何十人もの優れた伝承者たちが相次いで発見されていった。例えば、M・M・コールグエフ、A・K・バルィシニコワ（クプリヤニハ）、F・P・ゴスポダリョーフ、E・I・ソロコヴィコフ、M・A・スカースキンなど、百話を超えるレパートリーをもった語り手たちの名を挙げることができる。これらの資料集はアザドフスキーや彼の協力者をはじめとする研究者たちの手によって刊行され、もちろん、それぞれの資料集には語り手に関する論文が付されている。これらの語り手の中でも特筆に値する語り手は

コールグエフであり、彼の語った昔話は全部で千頁を越える。質的にも量的にも彼をしのぐほどの語り手は、おそらくこれから先、二度と出現することはないだろう。

現在の動向

六〇年代、七〇年代になると、語り手に対して払われていた関心が一時弱まり、代わって昔話の起源や構造に注意が向けられるようになった。しかし近年再び、伝承者と伝承の場に研究者の関心が戻ってきている。その理由として考えられることは、一つには、近年の口承文芸学がともすると、その担い手である民衆を抜きにして研究を進めがちであったことに対する反省がある。伝承者を扱った最近の研究としては、T・G・イワーノワの『ロシアの語り手たち』[10]（一九八九年）、K・V・チストフの「アザドフスキーおよび一九、二〇世紀のロシア口承文芸学における伝承者の問題」[11]（一九八九年）、V、ja・プロップの「昔話の生態」（『ロシア昔話』[12]所収、一九八四年）、E・I・シャスチナの『昔話、語り手、現代人』[13]（一九八一年）、K・V・チストフの『カレリアのロシア人吟唱者たち』[14]（一九八〇年）などがある。

現在ロシアでは、オンチュコーフやソコロフ兄弟などの先人たちが歩いた道を訪ね、口承文芸を記録するという興味深い調査活動が活発に行われており、三、四世代にわたる語りの資料が蓄積されつつある。その結果、横の比較研究と同時に縦の比較研究が可能になり、最初の記録から数十年を経て、伝承がどのように変移しているかを明きらかにする基盤が築かれつつある。この種の調査にあたって、一九世紀から二〇世紀初頭に記録された伝承者の直接の弟子、すなわち後継者をまずはじめに捜し出す努力がなされているという。叙事詩の分野でN・G・チェルニャーエヴァ[15]が確立した、師匠と弟子のテクストを個別に比較する類型学的方法が今後、昔話研究にも採り入れられるものと期待される。こうした調査、研究は口承文芸がたどる今後の運命を知るうえできわめて貴重なものであり、この先どのような実りがもたらされるか、たいへん楽しみである。

現在、伝承者の問題に関する研究において注目されるのは、テクスト研究、変移理論、伝承理論などの発達がある。口承文芸の変移の多くは、伝承者が新しいものを作り出した結果ではなく、伝承者が自己の記憶のひだの中に蓄えている「口承文芸の知識」の中から、交換可能な同意語やモチーフを取り出して入れ替える結果として発生することが判明している。この入れ替えが意識的なものであるが、無意識的なものであるかという点については、残念ながらまだ十分な研究がなされているとはいえない。これはきわめて複雑で、慎重な検討を要する問題である。現段階でいえることは、K・V・チストフによれば[16]、テクストの無意識的揺れの中で、伝承者が意図的に行うものであるということである。彼はこの点に関して伝承者自身が語った興味深い言葉を引用し、この問題を解く手掛かりを与えているので、ここに引用しておく。ヴィリーナの有名な伝承者であるT・G・リャビーニンの孫にあたるI・G・リャビーニン=アンド

レーエフが一九二一年にペトログラードに招かれ、同じ筋のブィリーナを何度か吟唱した際、吟唱するたびに少しずつ変化することを、それを書き留めていたV・N・フセヴォローツキー=ゲングロスに指摘され、次のように答えている。「どっちでも同じことさ。好きなように書くがいい」。昔話の有名な語り手F・P・ゴスポダリョフも同様のことをいっている。「おまえさんはニコライという名前だが、コースチャと呼んでいい。おれの名前はフィリップだが、他の呼び方をしたっていい。昔話だって同じことさ。イワン王子というのがいるが、それを鍛冶屋の息子イワンといってもいい」。

変移理論で注目しておきたいのは、昔話の決まり文句を扱ったN・M・ゲラシーモワ[17]の研究である。彼女によれば、決まり文句とその他の部分の相違は、前者が固定部分、後者が自由に変化する部分ということではない。両者の違いは変移の振幅の大きさにあるにすぎず、決まり文句とされる部分も同意語に取って替わられることがあるという。

彼女によれば、交替しうる部分は大きく次の二種類に分けられる。

一、同意語、または意味の同じ語結合

二、特定のコンテクストの中でのみ同意語と呼ぶことができるもの

a　人名、地名

b　数字

c　意味は同じではないが、コンテクストから見て、同じ機能を果たしている語結合。

例えば、「そびえたつ山々」と「うっそうとした森」など

このように、同意語、または全体のコンテクストの中で同じ機能を果たす語結合が入れ替わることによって変移が生じるということは、伝承者による新たな創造の可能性を否定するものではない。新たな創造は、時代の移り変わりの中で生まれたり、民族接触によって外部から流入したりしたものが、伝承者の中に蓄積されている「口承文芸の知識」に取り込まれる結果、生じるのである。

すでに述べたように、これまでのところ、ロシアの伝承者理論がもっとも進んでいる分野は叙事詩と泣き歌の分野である。テクスト研究、一つの時代におけるテクストの発展過程、その過程と農民文化の発展がたどる一般的歴史的過程との関係、テクストが伝播するメカニズム、テクストの覚え込みとその再現の法則など、じつに多面的な研究がなされており、さまざまな成果が現われつつある。しかし、昔話のジャンルではこの方面の新しい研究はまだあまり多いとはいえない。

最後に、現在のソビエトにおける重要な研究動向として触れておきたいのは、V・V・イワーノフとV・N・トポロフに代表される記号論の立場からの口承文芸学である。これは口承文芸をコミュニケーションの手段、一つの記号体系として把握し、口承文芸の各ジャンルや儀礼の構造を解明し、そのような構造が形成される法則性を明きらかにしようとする研究である。ところが、口承文芸のテクストの構造はそれ自体を分析しただけでは解明できないということがすでにこれまでの研究からわかっている。特に儀礼的なジャンルの口承文芸のテクストというものは、民衆の日常生活、世界観、信

仰、儀礼など、民衆の幅広い活動や観念の構造の、いわば集合体であって、コンテクストを抜きにして口承文芸のテクストを論じることは不可能である。古代社会においては人間の行動や思考のすべてが未分化の状態にあり、渾然と一体となって発達していったという点を十分考慮に入れておくことがたいせつである。このような認識の上に立つなら、宗教と芸術のいずれが古いかといった二者択一的な考え方は意味を失うはずである。情報の送り手――テキスト――受け取り手という三要素の関係から口承文芸を見る研究方法が採られることにより、結局、再び語り手と聞き手という問題に研究者の関心が戻ってきたというのが現在の状況である。

伝承とその機能、「個人の創意」と伝承、伝承と新たな創造、これらはフォークロアがたどる一つの過程の中の、二つの側面である。ロシアの伝承者論は時代によって、この二つの側面のいずれか一方に研究の比重を置きながら、全体として見れば、均衡のとれた歩みをしてきたといえるのではないだろうか。

〔注〕

(1) Песни, собранные П. Н. Рыбниковым. т. 1-4, 1861-1867.

(2) Сказки и предания Самарского края. Собраны и записаны Д. Н. Садовниковым. Записки РГО, 1884, т. XII.

(3) Гильфердинг А. Ф. Онежские былины. 1873.

(4) Ончуков Н. Е. Северные сказки. Записки РГО, 1908, т. XXXIII.

(5) Зеленин Д. К. Великорусские сказки Пермской губернии. Записки РГО, 1914, т. XLI.

(6) Зеленин Д. К. Великорусские сказки Вятской губернии. Записки РГО, 1915, т. XLII.

(7) Азадовский М. К. Сказки Верхнеленского края. Иркутск, 1938.

(8) Azadowsky M. Eine sibirische Märchenerzählerin. Folklore Fellows Communications, No. 68, Helsinki, 1926.

(9) Азадовский М. К. Русская сказка. Избранные мастера. Л., 1932.

(10) Иванова Т. В. Русские народные сказители. М., 1989.

(11) Чистов К. В. Азадовский и проблема исполнителя в русской фольклористике 19-20 вв. СЭ, 1989, № 2.

(12) Пропп В. Я. Русская сказка, Л., 1984. 日本語訳　斎藤君子、せりか書房、一九八六年。

(13) Шастина Е. И. Сказки, сказочники, современники. Иркутск, 1981.

(14) Чистов К. В. Русские сказители Карелии. Петрозаводск, 1980.

(15) Черняева Н. Г. О былинных сказителях Карелии. В кн.: Русские эпические песни Карелии. Петрозаводск, 1981.

(16) Чистов К. В. Народные традиции и фольклор. Л., 1986.

(17) Герасимова Н. М. Формулы русской волшебной сказки: (К проблеме стереотипности и вариативности традиционной культуры). СЭ, 1978, № 5.

（さいとう・きみこ）